

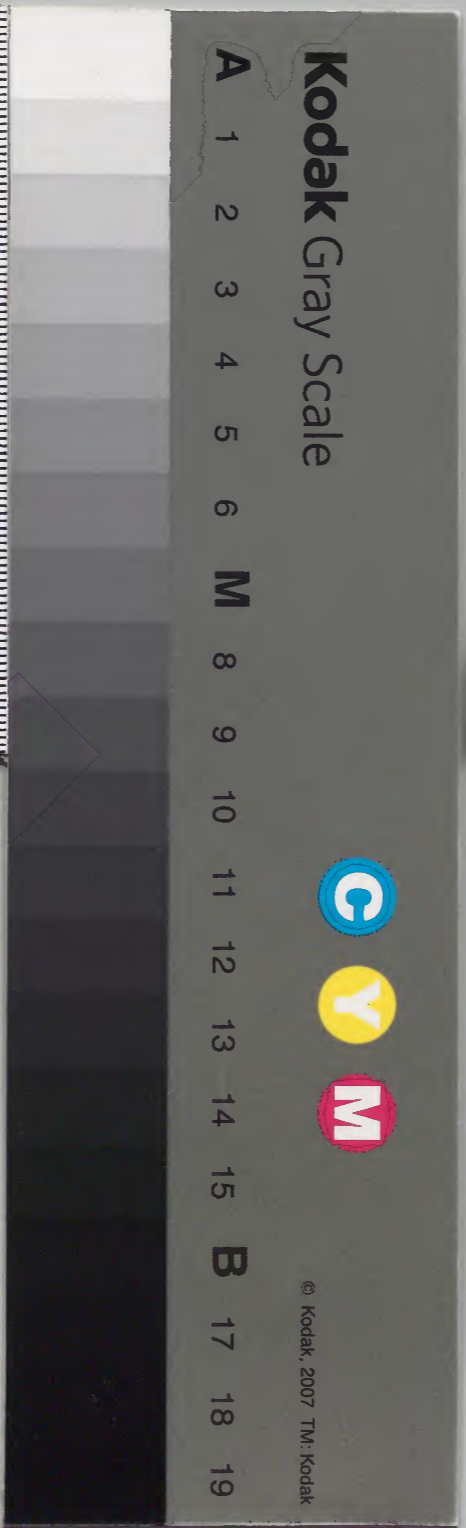
徳園
石

五松士心
三編
三

内閣文庫			
一九七函	一六冊	二七〇二號	和書類

太政官文庫			
一六冊	一八冊	二七〇二號	和書門

内閣文庫	
番號	和 11702
冊數	16 (13)
函號	197 97



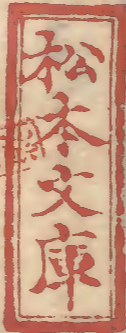
雲根志三編卷之三目錄

奇怪類 二十四種



鸚鵡石 十七	津石 十五	金地石 十三	鍋弦石 十一	鼓石 九	白玉 七	鹿壺石 五	石神 三	石 一
--------	-------	--------	--------	------	------	-------	------	-----

御猿石 二	中窪石 四	神牛石 六	輕重石 八	生臭石 十	雨石 十二	夜泣石 十四	左石 十六	雙子石 十八
-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	--------



雲根志三編卷之三

目一

松風石 十九

搖石 二十一

虹石 二十三

變化類 二十一種

望夫石 一

材木化石 三

鎌化石 五

貝化石 七

橋木化石 九

星化石 十一

魚化石 十三

龜石橋 二十

コトコト石 二十二

燒石 二十四

萬物化石 二

楫化石 四

燈心草化石 六

梨化石 八

燒木化石 十

木葉石 十二

鯛魚化石 十四

松割木化石 十五

蝸牛化石 十七

米粃麦化石 十九

銀杏木化石 二十一

冬瓜化石 二十三

諸木實化石 十六

鑽螺石 十八

樟化石 二十

扇化石 二十二

雲根志三編卷之三目錄終

雲根志三編

目二

雲根志三編卷之三

江州山田浦木内小繁重曉著述

奇怪類

宗石一

帝都六彼羅よ六道より地名ありのいハ大寺

今ハ幾よ珍皇寺より小菴残りて寺跡と

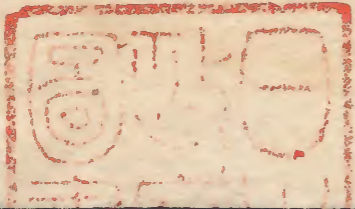
あ人も稀なり當菴の境内は古なる石佛教跡あり

何の佛のしるしも詳ならず其古物な

了或時上京の富家某一躰と掠取て居亭の庭に置

て忽其夜家内よさぶくの怪異もありて翌日

送了かすく荊州記曰臨賀馮乘縣東之崇石のた



雲根志三編 卷三

一

これなり雲根志前編後編は靈異奇怪攷學祥異の編
とて奇談を記すなり。都て此類ハ風流家の好む
ものありずる人信ずべし。俗説のさうとこそ
ありぬ。

御猿石ニ

南都より吉野へ通るに水原村より而も足寄と人あり
其村より一歩ハ大坂才ハ奈良と云ふなり。時と人
同夜は同一夢と見え其夢は異形の人七人あり。一
は其方所持の田地何なり。而の土中は数千年に
及今時未ださき堀出す。是方不思議なり。い
と人々水原村に集り談じて夢の教の所説は云ふ。其
神

石像と七所堀出せり其形佛にあり。人あり。一
面所志やして猿のごとく。鳥帽と云ふあり。子とい
はるるあり。里人ともいふ。一は七所とも其田の畦
に今もあり。其は何のありき。一は菴門周弁
の法なり。

石神ニ

洛大宮通の西上三賣のおよ石神の社ありて
岩なり。此神所の岩昔堀川の西二条の南あり。中
禁裏の築山に堀り。或時奇怪ありて禁闕の外に
あり。一は石上大明神と崇め。真言の僧今これと
して

中窪石 四

播州佐與春名忠成の説は同郡横坂村の下川中ニ大石ありつづも凹なり大なる水一石を貯ふべし此の里俗雍風岩を号す旱す時ハ近頃の百姓大勢集り此石の上或は近邊をいも奇麗に掃除しほま穢し物を凹なる中へ投じ其物を遠去りしり忽大風雨して彼中窪のちかぢ不淨の物を流すすほの大雨降じしより今もかたむけしり

鹿壺石 五

同人の説は同郡林田川の川下は皆河村のしりあり此河の山中は鹿が壺といふ石あり全體平山数百丈一面の大石なり此岩所々大小の穴と十餘あり其内四つ五つハ穴の深きもの多し許りしりしをてり村の者望み禁して此穴近邊一人と近よやするの故ハリ此穴へ何れも投了時ハたれも地震動して大風雨と發し民家を揺下り劉登之江州記曰興平縣蔡子池南山有石穴深二百餘丈

神牛石 六

山城國久世郡巨掠の内ニ福寺の境内ニ神牛石と云ふあり其形牛の如しして天工自然の大石なりけり此牛石天下ニ凶事ありし時ハ此石より汗を流す又奥羽宮の松前田の月ハ牛石ありとの

形真かたちまことは似にたり牛石うしいし和漢わくわんももまきりし已まに續編つづき記き

白玉しらたま七

安永三年甲午あえいねいしの及京東六條正因寺けいとうりくじょうの當住とうぢうりが
宅たくはありとくし彼檀家かだんかは伊丹いたんを與よき借かりし人
あり己前おのゝまへ甚おほま真まことりし或時あるとき白髮はくはつの老人らうじん梨なしを荷かひ
て表おもてはありし梨なしを求めし再また應こたじし亭ていに梨なしを
かりし春はるはなは老人らうじん梨なしを一ひとつ皮かわと去いり亭ていに
ふふれと吟うたはし其風味そのふうみもよのべしし
一ひとつ買かんと表おもてへ出いけしを彼梨南人かなしなんじんええす側
とこれを一ひとつの紙かみよつしとわあを取とりあげしを
は白玉しらたまなりし人ひとありし彼梨かなしありしとわあを求もとむるは

江えええしを先まに取とりめし秘藏ひざうしけしを
り家富けふちて今いますし繁榮はんえいなり近頃きんぎやう堂上どうじやうのりし所
家けより所ところのりし彼かのむとこありけしを一夜いちやしめ
きし所洗ところせんのとめしきしをかりしと所ところをとりし
らむかしし大切たいせつなりしとすきししけしを
とせん其所そのところを

ふのりなりしはむのりしけしを家けありし

輕重石けいじゆういし八

京州三條大橋けいしゅうさんじょうたいしやうの邊へは河口氏くわくち士礼しれいし風流ふうりゆうの人ひとあり
折かりし亭ていにありし石いしのりし談だんす此人このひとは洛西らくせい
山やま今宮いまみやの社内しゃうち社の側かたなり末社すえしやの神前かみまへはたきし鞆たもとなり

なりある石あり此石は叩て奉り時ハ甚重く振く奉り
時ハむゆぐ恒く此れに従和後ハ甚多し前編ハ
詳し記す

鼓石 九

太平記三十九卷ハ曰康安元年七月廿四日阿波の
門俄ハ潮去く陸ハ高し高し峙り岩上ハ筒の
り二十尋ぞり大鼓ハ白銀のびやとぞり
面ハ巴を画き志ハ龍を拏てハせり
此ハ時ハ人々とぞり近し三四日
近傍の人数百人よりこれ物ハ筒ハ石
面ハ水牛の皮とぞり尋常の揆ハ

鳴さばとて大なる鐘とぞり大鐘を撞や
よつぎとけ此大鼓天ノ響き地ノ動とて時
をうりて山崩して谷ハ谷ハ潮涌く天
ノ漲りけとて教百人の浦人とも今大地ノ底ハ川
ノ肝魂も身ハ副下倒りともなく走
りたり四角八方ハ近し其後ハ近し人
近し天ノ響きけん海ノ入んぬり
て大鼓も見えずなりけり

生魚石 十

奥州仙臺の仙人青燈下祇川坊の物ハ今より二十
年あり仙臺の内小笠村より石の氏津の社ハ

ゆあり石工集て石切其石の中七八寸ぐり空
虚して水二三升流出其水中より長さ四寸ぐり
かゝ生魚二匹飛ぶ則死し何魚よりしと云ふ
らひ其形鮎魚に似たりめづるゆゑと云ふ
守よも、大守所使傳く其社日なすは社日干魚よ
し今も藏すし怪石供曰杜館字季揚有圓
石大如柿作鎮紙一日墮地破而為三四段空有小魚
寸許跳躑頃刻即死

鍋弦石 十一

飛浮ふる福高其ハ子ガ弄石の親友なり金華三
愛之人滄海と号す好事風流の人なり近以るる

大石もとるひさうして自其地は遊行し其所の
里俗の物作す其石の形状は圓一十種と撰摸
し詩歌俳句を依り海内の同好よふちある其
中は鍋弦石しりあり同小坂より形鍋弦の如く
小く巨大なり長さ十二間四尺内廣さあり
三間狭きあり一間地上よりえうろ七間ろの
鍋弦の上は松栢生茂と云ふれども全體ろかりたり
えうれを石栢の裏と云ふり下ハ谷川なり一名
飛虹巖より怪石供曰大山下有連理石高十二丈
自下及上皆合而中間廣六尺

雨石 十二

肥前國菽小島なる海濱に寛保元年辛酉の辰に國秋
の村中より石が雨としてあり其日朝より曇天となり風
強く驟し晝過ぎも曇り風強く空中雷声
の如く鳴り天より石と落す大地震動して其のあり
る世界も地の底へ落入りよ見えし其落す石大
さ箕のごとく重さ十四五貫目もあり常の石より
少異なりふあり其石の教五箇所へ落し色ハ
五石も異りして黒く白く或ハ赤く大地へ三尺位の
に落入り今其五箇と取集め菽の真言寺の境
内に置し晏溪志曰天復中洪州實石長七八尺圍
三尺餘青碧如玉節度使劉威命昇入觀内

金地石 十三

安永九年庚子二月播州赤穂大河良平予が真言
訪り終日終夜石の奇談あり去り此
信州は遊びし不圖百姓家は宿すあり
夜半の此小僧は起り家のをたらし
水なりと人家の内ものを呼く其故とあり不
以何者ありし水の出ふを尋ひし
は傍に草刈籠の中なり其のしるしを
草刈童呼てありし其小石より水とありしや
きの山より拾ひありしと云ふて二三日あり



挑
 園
 踏



出^{いづ}く^くも^く口^{くち}不^ふ審^{しん}は^はか^かひ^ひて^て牛^{うし}の^のひ^ひを^をと^とて^て熱^{あつ}湯^ゆ
の中^{なか}へ^へ投^なげ^がて^て暫^{しば}時^じし^して^てし^しり^り出^いで^で試^しま^ま水^{みづ}出^いず^ずな^な
此^こ石^{いし}は^は赤^{あか}い^い砕^{くだ}き^きる^る石^{いし}中^{なか}少^{すく}く^く空^{くう}虚^こし^して^て中^{なか}一^{いつ}
寸^{すん}む^むり^りな^な金^{きん}色^{しき}の^の小^こ地^ちも^もく^く死^しし^し舟^{ふね}も^もく^く

夜泣石 十五

遠^{えん}州^{しゅう}佐^さ与^よ中^{ちゆう}山^{さん}往^{わう}還^{げん}の^の真^ま中^{ちゆう}へ^へ何^{なに}も^もな^なく^く何^{なに}も^もな^なく^く何^{なに}も^もな^なく^く
へ^へり^り昔^{むかし}孕^{むす}女^{むすめ}賊^{ぞく}の^のため^{ため}に^に害^{がい}を^をな^なせ^せて^て逃^{にが}げ^がて^て霊^{れい}魂^{こん}此^こ石^{いし}に^に
し^しり^りて^て夜^よ泣^{なき}し^しと^と子^こを^をな^なす^すその^{その}説^{せつ}音^{おん}糖^{とう}の^の餅^{もち}の^の味^{あじ}
由^ゆり^りと^と世^よの^の人^{ひと}の^の耳^{みみ}も^もく^くく^くあ^あら^らう^う長^{なが}文^{ぶん}ゆ^ゆり^りと^と
略^{りやく}十^{じゅう}大^{だい}礮^{ぱう}の^の虎^こが^が石^{いし}に^に化^かり^り信^{しん}州^{しゅう}姥^{おば}捨^{すて}
山^{さん}も^もく^く姥^{おば}が^が霊^{れい}石^{いし}と^と化^かり^り遠^{えん}州^{しゅう}掛^か川^{がわ}の^の姥^{おば}が^が霊^{れい}石^{いし}

姑^{あぢ}が^が霊^{れい}石^{いし}伊^い賀^が國^{こく}名^な法^{ぽう}教^{きやう}中^{ちゆう}知^ちの^の夜^よ泣^{なき}石^{いし}同^{どう}心^{しん}阿^あ波^は教^{きやう}風^{ふう}
村^{むら}の^の夜^よ泣^{なき}石^{いし}此^この^のや^やあ^あけ^けて^て井^いも^もく^くく^くあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^うと^とあ^あら^らう^う
妖^{よう}僧^{そう}等^{とう}が^が糊^こ口^{くち}の^の種^{しゆ}し^して^て物^{ぶつ}産^{さん}家^か赤^{せき}石^{せき}家^かの^のひ^ひの^の需^す
む^むぎ^ぎの^のし^しめ^めす

志津石 十五

美^み濃^{のう}國^{こく}養^{やう}老^{らう}瀧^{たき}の^の近^{きん}山^{さん}田^{でん}儀^ぎ山^{さん}と^とり^りあ^あら^らう^うあ^あら^らう^うあ^あら^らう^う
り^りす^すて^て此^こ山^{さん}は^は木^き石^{せき}な^なり^り方^{かた}十^{じゅう}間^{げん}餘^ご四^し面^{めん}の^の大^{だい}石^{せき}獨^{どく}
立^たて^て往^{わう}還^{げん}し^しも^も鮮^{あま}も^もゆ^ゆ麓^{ふもと}は^は志^し津^つ村^{むら}と^とり^りあ^あ
り^り昔^{むかし}志^し津^つ之^の即^{すなは}ち^ちが^が任^{にん}せ^せし^し古^こ法^{ぽう}か^かり^りと^とり^りひ^ひ作^{さく}し^し
即^{すなは}ち^ち生^{せい}涯^{げん}の^の内^{うち}常^{じょう}に^に此^こ石^{いし}を^を巻^まき^きし^し暇^{いとま}あ^あり^り此^こ石^{いし}の^の傍^{かた}
晝^{ひる}夜^よ此^こ石^{いし}上^{うへ}に^に遊^{あそ}び^びし^して^て帝^{てい}滅^{めつ}ぬ^ぬ霊^{れい}魂^{こん}火^かを^をな^なり^りて

すの付ハ橋あり双子橋なる所ハ山ノ下ニあり此石の邊ニ
近キ

松風石 十九

伊賀國阿波郡鳳村對ケ洲川の傍ニ片々あり流れて川中へ
こゝにあり大石あり松風石といふ人々此石の中帯ニ
松風の声あり時々大々吹くやうなり
ゆゑありと又同心山田那鳳鳳村ニ鳴塚といふ石
穴ありこれニ帯ニ石中ニ松風の音なり

亀石橋 二十

同國名張郡黒田村の入口ニ掛したる石橋これなり此邊
山家ニ狐多ク狐晝夜此所を行来するは橋流す
來りて道下ニ溝あり飛越て又向かへ橋流へ上りて
道なりいづこびとみれば此橋あり
り狐此橋ともすの付ハ必此村ニ變ありといふ
百もあらずとらふれは狐橋といふ
れを村中大ニ恐るゝといふ

揺石 二十一

揺石ハ伊賀國阿波郡嶋ヶ原村山城の大川系の界ニ
り大石これなり人石上へ登りて動する自然ニ
うづりて揺石といふ大石にして人力の動
するべき石ありあそびとて遊ばし揺石
の前の記す



肥前國松浦の望夫石前編に記す又云之河國赤坂の上
 宮路山より夫石よりある形女の粧ひとてめづり付く
 以往古大江貞元後よりて唐土に渡り其毒別紙に
 此山上に船帆らしむる石と化せり 大明一統志曰宋本
 平府城望夫石輿地志曰南陵縣女觀山望夫石和漢同日
 の談なり

萬物化石二

萬物石は化すの地あり前編に記す又聞越前穴間の
 瀧より中濃郡上は隣り山中に此瀧壺へ何れも
 投じても翌年に至ると悉く石と化すと云れを取
 りて石と化せり此瀧壺のぬきもの其物と

はむかし中松を其物とてあまろけしむつて
 物ハ白色くかたし今鍾乳石髓のたけしむつて
 此水上は岩窟あり石髓なる流也とて此瀧壺は
 万物とていふものなり 抱朴子曰玉生山有玉膏流
 出鮮明如水晶疑らる此物なり 又飛浮心海とて滄
 洲の之同心信州界徳子山の奥谷川の流は万物と化
 せ物あり滄洲に石あり試す石は化すものなり 又
 化すなり 軟くあしすきものあり 予がり
 其土又二三年も其地よりなる石と化すべしや又賀州金
 澤麦水のり越中城傍の土向ひなり 赤漆山よりある
 万物石は化す地あり



材木化石 三

飛州高山滄洲のり同小増田郡河多所のつの山奥十四里乘鞍が嶽の麓は材木の化石あり滄洲よりして悉くこれ採るなり其材木長さハ三四間長さハ七八尺太さ五六寸角より一尺四五寸角まで皆ありて角は化石の材木なり大なる石よりけあらざる悉く硬石と化せり木理あり鮮くは先は符穴なり此れもあらず滄洲の園ヤ十種の大石の中あり又賀物麦水のり越中立山へ芝倉りのほ麓最初の坂口土中残らず数千の材木ありて悉く石と化せり此れおのり英國も不邦も多し前編と併せ考ふべし

楫化石 四

伊勢國神系の温泉は太郎次よりあると云ふ石の友なり去ぬるはありて数日奔石の話の中は楫の化石の楫話す卅年已前のゆかり楫系貝石の大石は破り船の楫一川出たり廿石船をうの小楫なり全體木なりてはこれなり今石と化したるもの楫は夫なりては石舟は用ひ楫を横へ長しと石中より鑿出せし時四川五つは砕け捨たりと云ふもつぎ今すしハ全體なり近國の或は家へ献じたり

鑿化石 五

同人より廿五年をり已前神奈川貝石山より貝石を取
んよめは大小を破つて鎌一つ出り柄木埋舞
て本と見えながら化して石となりて甚堅硬なる鎌
の方向破出せし時其形全く鎌と見ええて鉄ハ泥の
ぶくく物と失う柄木より近頃の人求め得くぬ
ア

燈心草化石六

濃州石原村三宅氏草草の化石よりもの推考
此より此人より草草と化す田の中より一株石と化せ
て形細く長く白く一実燈心の如く数十
中一握りより塊あり其甚奇品として

べきものなり然れども燈心の化石なるものなり
このものより廿五年前高野山に化石を
て数百種の奇石と云ふは日光の索麩谷の索麩石
このものあり色形実よ索麩より重く堅き石なりこれ
も長二寸をり一握塊あり其後日光山の索麩
谷より此石を求めはけりすは大小相違の物あり
今これ考へ合すは三宅氏の燈心の化石と云ふの索
麩石恐ら同一種のものなり産所は其の
一はの人考勘し

貝化石七

貝石和産多し形状光彩硬軟悉く前編に記す今

又其ね求め白く産所と茲に附録す大和國友田舎
 利山龍土谷同心高井虚空藏山同心添上郡弘満寺
 山同心宇多郡太郎山同心河内界峠より不又勢州
 津より一里北南観音寺村の砂中よりあり里人砂貝く
 以経が峰の麓穴倉村志摩國安樂島尾州知多郡内
 海大坊相模國芦柄山安房國今市の上総心白里村
 美體あり硬くして糸が石を破碎けを石中り
 白色く拾の彼あり今貝かり白里村書て九
 十九里村より百里より一里たりありり意かり
 近江國岩倉山野寺の近邊同國甲賀郡神保村仲村稗茶
 村安樂寺山此産ハ赤貝多濃州赤坂山此産至く細

小川くまな螺が下野國宇津宮若州山上村賀物河北
 郡涌波村同國傳燈寺山より上品あり同心金澤より十二三
 里北能登の内游山伎ね小太釈山庄系同心之吉紀州畑
 島土佐國田野浦西十溪同心安房郡唐所佐村同心歡
 の峰奥妙仙心近不籠嶽和州吉野郡坂村同國同郡
 池ヶ系村安藝國蛤山長門山下の園洲戸の向の島肥後
 心芦小形石産山より心石の貝石種あり此而く心せ
 貝より心一原の佐村釣此貝石を并の心あり

芦山の雪坂の心村の世貝心世の心心心
 梨化石ハ



浴東六條法泉寺の神木は梨化石なり其のあり大なる
のびく色理形状梨の如く一全體として一八半より破
る其破肌は梨の心の形沈んであり梨は輪切りに
して異なりなり一人梨の化石なり豊後國球珠の
産する所なり五所見て見て按ずる梨の化石はあは
一物の奇ぶかり真紋石の如く恐らハ虫の化石なせ
何虫とりの詳なり下りて至りくふ石なり

橋木化石 九

播州佐用春名氏先寺同州吉岡の温泉へ入湯して其
近に寺あり寺倉大明神なり大社へ詣り社の上ありあり
前後左右老樹あり彼社の下あり皆大なる材木を

縦横は積上げて其上は社を建てる所の材木長さハ五六
間短きハ三四間或ハ四角或ハ平木或ハ九柱沈んで造
り成り材木なり皆石に化せり一山あり山ありあり
数万の材木悉く縦横は積上り木は鮮にして皆硬
石なり山の半腹より麓の方ハ草木よて石なり土
中ハ今も同く此材木石に欠取れる大なる宗ありあり
山ありあり昔神あり隠岐の國へ此所より材木
掛んとて集めたり材木なり此山の麓ハ大海なり
海中遙の沖は柱二本なりびまはり実り杉杭とみゆ
乞も又化石なり地理志曰右北平驪城縣西望
巨海有石如閣道如柱形柱而立于巨海世名之天

橋柱

燒木化石 十

洛の河口氏山城國上の醍醐の境内に彌勒院あり
 此寺の庭に泉水あり橋木の化石あり燒殘
 あり板なり院に當院先年の冬火災あり消火
 の上直に大雪降る半月のな其跡を掃除すに
 燒殘あり材木悉く石と化せり則此橋板なり
 星化石 十一
 落星石ハ和漢にも説多し前編に記す又賀物全
 以麦水のりし不金澤才川法船寺町或人の家の裏に
 臺壁の下石垣の中より石これなり他石も大なり

傳りし貞享年中星此所へ落り此を化石す

木葉石 十二

前編に詳かり木葉石も産所品れも多し賀物
 麦水のりし越中の中五ヶ山より賀物より流罪の者
 のも不そ常は通路に絶り駕籠の底よりし
 不越て此地よりなり此所は木葉石多し
 上より又賀物城端の山向なり赤流も木葉石
 あり至品なり又飛物高山滄洲大石十種の中より
 同山上白川尾よりし木葉石あり石質黒く硬く
 葉鮮く甚絶なり又伊賀の不睡子の中山
 田郡中村川の中は拾ひ得る石質黒く柔く



一 柏の葉なり

魚化石 十三

筑後柳川君山のり柳川の近つてありあのつ士田尻宗
助より人魚の石を化せし蔵す此邊にてシクチといふ
魚なりシクチを伊勢鯉に似て魚なり、大きニ又
餘の魚半より尾の方、朽失すより此の方ハ石を化せり
甚堅くシクチ面目口鬣鮮明して石なり、胴中より折口
の骨肉ありしれど其石を化せしよりその
奇なり又信州岡村柳屋平在島より人魚の奇あり

鯛魚化石 十四

同人より同水と妻於日向見山の二里より近き所より鯛石

村よりある里民の侍小姓此所は父子暮すとのあり
其子海邊より鯛魚をわく持歸り父より父の
是は貴人の物にして我ども喰ふ魚より山神の供
物なりと彼父子の意はまうせ山に祈り神の供するもの
魚忽石と化せり今小社新建て鯛石と納め氏神と
崇む鯛石村の鯛魚大明神とせり

松割木化石 十五

美濃國加見郡石系村之宅氏のつら石系村の隣村妙賀
村より小池佐右衛門といふ人あり十ヶ年已前松の割木を
買て其家の軒下積置翌年の春是松積改め土
を掘り下り東通り悉く石と化せり予これ怪むとあり

つら實は割木なり實は石なり甚妙奇の物なり

諸木實化石 十六

諸木の實は化石本邦諸州よりありとて甚稀なり
そのそねがし一舟石系は蓄り人せし先手は徳
石月吉山中遊行せし時實の化石を數あり月
吉の里より廿町をり未申より小山あり大木なりし
石砂小石の多き所より當山より系なり白土の塊數万
あり小なるを桃栗のごとく大なるを鞠の如しその白
土の塊を水にて洗へば白土を多く白石を多し其石皮の
方は軟く水より硬くして心より山にハハの如く冷
し其石を碎き破れを中より諸木の實の化石あり

蝸牛化石七

蝸牛の化石を貝石の類として又夫なり貝石と云せしむ
るなり別種のものをかりて藏するハ大さ掌の如き
石面は蝸牛之四十所々々化石他物と交す蝸
牛の鮮かり石質薄黒く蝸牛ハ白く石硬く
愛すべき奇ぶなり隣村矢指村石津寺の隣に
下向の河津津の驛に於て予は又濃州
赤坂の稀なる

鑽螺石七

京伏見海道一の橋の今西某ハ予が朋友なり此人の
隣家よ山へ入る古松の伐株と堀く松明となり

者あり或時伏見の山奥は入る大木の古株と堀く
五六尺下の数石あり其石割石あり山石あり予
他石より異なりよめて一石を携へ谷川に流し
鑽螺数千塊となりて石と化し予のかり石質
堅硬し色薄黒かり鑽螺の大き一寸或ハ二寸
縦横は塊に化せしものなり他の貝類をいふは
今西氏これと信じて予は贈り大さ箕の如く重さ八
九貫目予今珍惜す

焼米石を和信も多し前編に記す此本氏の伊
賀山田郡喰代村廣小畑より畑の土中より米初麦の

焼米石を和信も多し

化石の石すすれ状真の石の如く住古此地は米藏と
兵火は焼失して今石を化して見ると

樟化石 二十

法衣石と化すもの如くもに少くも前編に記す又
此本氏の石は寶曆年中伊賀國伊賀郡笠部村の中
の尾谷の山の麓より徑三二尺餘長さ二間餘なる木の
化石が穿ち出す破取て民間に持去ぬ同心を以て
奥村山中より木の化石が出する木の石は化せし
もの如く漢土より俗民松化石より本邦より里俗
楠の化石よりあるなり此中法衣あると記す

銀杏木化石 二十一

銀杏の木化石の如く京都の商家に求め得る
大き圓の如く外皮は香の木の荒皮真の如く本
肌玲瓏として白く玉と化し心も木理鮮く黒く
光り漆の如く烏木のごとく堅硬
美なり愛玩の宜しき物なり又濃州市栲谷氏が
藏せし松の化石大き右の銀杏の木と同く外ハれの鬼
皮其より化し木肌白く透て白玉の如く心ハ巻木理
鮮明として黒く尤上品なり同形なりて外皮は
銀杏のごとく方す

扇化石 二十二

賀州金澤某の家室に扇紋石といふものあり石の天と

徑一尺九寸五分堅一尺三寸厚八寸九寸をく黒
 色潤澤の石なり石面よりきき扇一面石上の
 せしめあぐ紋理鮮明とくくしれえし其扇
 の大さ左右一尺六寸堅一尺一寸六本骨なり勿論近
 世の製よりす上古の軍扇なり其形容純漆堅潤
 ぶく折目等いく水と濺けむく明堂と
 して疑もかも扇の化石なりと是等ハヤとて天
 下のふ宅く俗間の弁ぶよめあす

扇紋石

越中の人珍藏す
 今加お金澤の
 士人家へつてこの
 扇近世の製と吳
 かん古の軍扇土
 中よ地並木葉石
 かの如く土無
 石化しぬ



雲林志三編

三十一

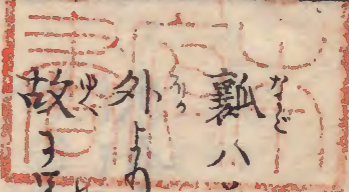
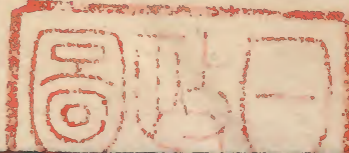
冬瓜化石 二十三

冬瓜の化石を賀州金澤津田氏の所蔵にありて同州
 河内郡付塔山石洞中より得たりと真圖細辨す
 行つて其書より長さ一尺六寸五分圍一尺五寸餘色灰
 白石膚潤澤日映してこれ瓜なるは全體は細小の
 銀星の如く冬瓜の白毛の化すところなり瓜の頂
 蒂より一破損して首尾透達す石中深窺ふと
 瓢中央は横て瓜核の累くするも鮮明なるは實至
 て剛く形容冬瓜は異なりなり

彼来書より按ずると
 京攝の間の冬瓜ハ形
 系なり他物も産す
 所の冬瓜ハ長く
 枕の如く今圖する所の
 石地は産す冬瓜は
 恰似するを以て移す
 瓜石と銘す



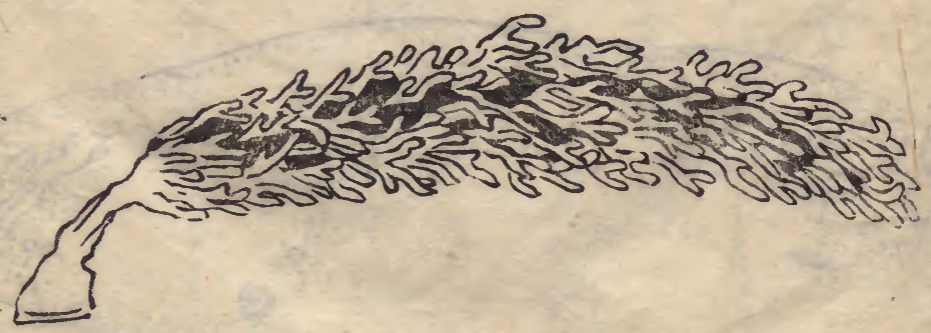
雲根志三編卷之三終



瓢八前圖の中ヲうく
外より入るものなり
故に方と字す



雲根志三編卷之三終



瓢頭

